



すき間を開けて

園長 野中 泉

つい先日、友人がフェイスブックに写真と一緒にこんな投稿をあげていました。まちの老舗のお米屋さんの玄関に 15センチほどのすき間が開いていて、その隙間には「ツバメが通ります」の看板が。お店の人に聞くと、毎年玄関を入れてすぐの土間に天井の梁にツバメが巣をつくるので、この時期はその子達のために玄関にずっとすき間をあけているのだとか。友人の投稿は「すき間を開けておきたいものです。ツバメにも、ヒトにも」と、優しい言葉で締めくくられていました。

コロナと共にあったこの一年は、毎日押し寄せるニュースや、不安をあおるようにまくしたてるワイドショーの情報に、振り回される毎日でもありました。感染症対策を軽視するわけではありませんし、園長としての自分は常に新しい情報にアンテナを張っていることを大事にしています。でもまるで犯人探しをするように、他人の行動を監視しあったり、責め合ったりする余裕のない社会には、ほんとうに心が疲れてしまいます。あたりまえの「優しさ」、小さなすき間を開けられる心の余裕をとすると忘れてしまいそうになる自分が怖くもなります。

この原稿を書いている今は、3度目の緊急事態宣言の最中です。1年前の1度目の宣言から変わらず保育園は、ずっと開園していますが、この間園長の私は、保護者に「お休み協力してくださいね」と「園に預けていいよ」を同じくらい言い続けてきました。一見相反するふたつの言葉、1年前には、その両方を口にする事の矛盾に、私自身が立ち止まる日もありました。でも、今はそのふたつの言葉を、同じように口にする保護者との関係こそが、このコロナ禍でもアトムがアトムらしくいられる証だと思っています。

コロナであっても働かざるを得ない、子どもは可愛いけどずっと一緒にほしい、その両方の保護者を助けるために毎日アトムをあけてきました。言葉にするとずいぶんカッコいいのですが、実際の現場での日々は、もう少しグチャグチャと揺れたり、ぐるぐると迷ったりの連続でした。でも、保育士や園の限界や、現状も正直に伝えたり、相談したり、助けてもらったりしながら、保護者と一緒に越えられてきた一年であったことを、むしろ意味があったとふり返っています。

新型コロナウイルスについて、「未知のウイルスは感染症の恐怖だけでなく、人と人との関係を分断する社会をもたらした」という文章を読んだことがあります。ほんとうに、そうだと感じるし、そうであってはならないと強く思っています。コロナ禍というこんなに苦しい時代に一緒に子育てをする仲間だもの。お互いを気づかいあい支えあう、そんな心のすき間（余裕）をあけられるといいな、そんなふうに思います。

だから、明日も、アトムに預けてください。そして、どうぞ明日も、アトムを助けてください。